

鐘が結ぶジュネーブ・品川の交流

KDDI株式会社 技術開発本部 標準化推進室 担当部長

つがわ せいいち
津川 清一



1. はじめに

2007年のことだったろうか、大晦日に私はジュネーブのITUで仕事をしていた。夜もふけてくると、どこかから鐘の音が聞こえた。最初は気に留めていなかったが、その内に、これは日本の鐘で除夜の鐘をついているのではないか、と思いついた。

翌日、音が聞こえてきた方角を探しに行くと、まさに、国連欧州本部に隣接するアリアナ美術館の庭に日本の大梵鐘が設置されていた(写真1)。調べると、この大梵鐘は数奇な運命に導かれこの地にたどり着き、ジュネーブと品川を結びつけ、両地域の交流を促す契機になっていたのである。

本稿ではその大梵鐘が当地に設置された背景及びその経緯を辿ることにより、ジュネーブと日本の交流史の一端を明らかにすることにした。

2. 大梵鐘の国外搬出とその経緯

1657年、現在の品川区にある品川寺(ほんせんじ)の



写真1. アリアナ美術館の大梵鐘

弘尊上人の発願により、徳川家康、秀忠、家光の供養のため、大梵鐘が京都三条の鋳物士・大西五郎左衛門により鋳造された。鐘面には京都七条の大仏師・康斎(こうさい)が6体の観音像を浮き彫りにし、更に観音経一巻が陰刻されている。そして、『武蔵風土記』、『江戸名所図絵』に、「世にまれなる梵鐘」として記され、その姿を確認することができる。

東海道の宿場町であった品川も、江戸時代の末(1850年代)から明治維新を迎えるころ著しく荒廃し、品川寺は本尊を安置した草堂と、江戸六地藏を残すだけとなり、大梵鐘も海外に搬出された。

この背景には、1868年に幕藩体制が崩壊し、新政府は、封建制度の廃止と並んで、仏教信仰からの神道の行事の強制的な分離(神仏分離)等、大きな経済力を持つ仏教界の勢力をそぐための一連の措置を講じたことがある。このような政策の一環として、新政府は多くの仏教寺院から仏像、梵鐘を調達した(廃仏毀釈)。その一部は、日本産の銅の品質が高いことが有名であった海外に売りさばかれた。また、寺の境内は最小限の広さまで縮小された。

1826年から4年かけて編纂された『御府内備考続編』には、品川寺の田畑面積は4,800坪、その内境内の敷地面積は3,366坪という記載があり、広大な敷地を有していたことが分かる。また、1836年に刊行された『江戸名所図絵』には、明確に鐘楼と大梵鐘が描かれている。ところが、1872年(明治5)に作成された『寺院明細帳』には、仮本堂、仮庫裏、物置、仏堂、尼堂のみが記載されている。本堂と庫裏が仮本堂、仮庫裏となっているので、両方とも一旦消失したことが伺われる。ちなみに、鐘楼、大梵鐘の記載は無い。境内の面積も1,024坪(官有地)となり、著しく縮小している。

1877年(明治10)に作成された『寺院明細簿』では、境内の面積は引き続き1,024坪(官有地)であるが、本堂が1873年(明治6年)に再建されたことが記載されている。しかし、1872年(明治5)当時と同様に鐘楼、大梵鐘の記載は認められない。

以上のことから、1836年には存在していた大梵鐘が、1872年の時点では記録から消えていたことが伺われる。



■写真2. Aarauで見つかった大梵鐘

(出処：F.Gysi, La cloche de Shinagawa et deux autres cloches dans la cour de la fonderie Rüetschi)

この間の経緯を説明するものとして、1929年10月15日のジュネーブ市参事会の議事録には次のような記載がある。

「どのようないきさつでこの大梵鐘がGustave Revillod (ジュネーブ・アリアナ美術館の創設者) の所有物となったのであろうか？ 資料が無いので不明だが、大梵鐘は徳川政府により1867年のパリ万博に出品された後、入手されたと考えることができる。幕末・維新の混乱期であったため、パリ万博への出品物の管理が行き届かず、第3者に売却されたと考えられる。(筆者訳)」

一方、1929年10月31日付けの新聞 (La Tribune de Genève) には次のような記載がある。

「この大梵鐘は1867年のパリ万博に展示されたという説がある。しかし、我々は、パリ万博に展示されたとは考えない。ヨーロッパへは、1867年ではなく、極東の船によりオランダ経由で1873年に着いたと考える。その理由は、最近Aarau (スイスの1都市) で撮られたこの大梵鐘の写真を発見したからである。Aarauの鑄造業者は、1873年のウィーン万博の年、鐘や壺等の多くの品物が極東の船でオランダに運び込まれ、その一部がAarauに来たことを覚えている。

また、本紙の読者から、10才の時Aarauの鑄造所の庭

で多くの青銅の壺や鐘を見た、これらは日本政府のために大砲に鑄直されると聞いた、という証言が寄せられた。(筆者訳)」

このLa Tribune de Genèveの記事に基づき調査を行った結果、以下の事実が判明した。

(a) 大梵鐘が海外に搬出されたのは横浜港と推測されるため、横浜毎日新聞に毎日記載されている積荷明細を1867年から1873年まで調査したが、大梵鐘の記載は無かった。

ちなみに、1872年6月22日付“THE JAPAN WEEKLY MAIL”によると、横浜に停泊中の船は次のとおりであった。

商船 (蒸気船)

米国籍、英国籍等8隻で、内3隻は1,500トンを超える大型船。出港地はGlasgow、London等が含まれ、既に欧州との航路が開かれていたことが分かる。2隻の荷主は日本政府。

商船 (帆船)

米国籍、英国籍、北ドイツ籍、フランス籍等10隻。200トンから795トンで、蒸気船よりはるかに小さいが、出港地はCardiff、London等があり、遠洋航海をしていた。

(b) 日本郵船からの情報

「日本で最初の海外定期航路として郵便汽船三菱会社が上海航路を開設したのが1875年であり、1873年に日本の船会社が欧州へ向かうということはないと思われる。明治維新開国後、横浜にはオランダ、イギリスを中心に外国の船がたくさん来ていたそうなので、品川寺の大梵鐘はそれらの船で運ばれたのかもしれない。」とのことであった。

(c) 1872年4月13日付けの東京日日新聞には、「官より差し出すものの運送費等一切は官が負担する」というウイーン博覧会事務局からの広告が掲載されている。

(d) 公文書研究者の小川千代子氏の証言によると、東京・竹橋の国立公文書館で、ヨーロッパで開催された万博に出品されたもののリストを探してもらい、そのリストを調べた結果、品川寺の大梵鐘に関する資料には突合できなかったとのことである。

(e) ジュネーブ・品川友好協会会長のフィリップ・ニーゼル氏によると、「数奇な運命の下、品川寺の大梵鐘は、



他の寺院の梵鐘と共に、Aarauのリュエチ鑄造所に、おそらく材料として使用される目的でたどり着いた。この鑄造所はスイス中の多くの教会の鐘を製作していただけでなく、スイス連邦軍用の大砲を製造していたようである。1870年の普仏戦争後もスイス政府は中立を守るため、大砲を発注し続けた。その当時大砲は相変わらず青銅製であった。」とのことであった。

以上の調査結果から、次の仮説が導き出された。

- ① 廃仏毀釈により、大梵鐘は海外に搬出された。
- ② 搬出は、一般の商取引ではなく政府ベースのものであった。
- ③ 欧州までは外国船により運搬された。
- ④ パリ万博やウイン万博へは出展されず、第三者の手を経てAarauに着いた。

これが現時点において判明した事実と仮説である。他にもいくつかの示唆が寄せられているので、今後は事実確認を含め、詳細に検討し証明する必要があるだろう。

3. 大梵鐘の帰国

1916年品川寺に入山した仲田順海和上は、明治初期に焼失した建物の再建に取り掛かり、1923年には総レンガ造

りの観音堂が完成した。また、大梵鐘が海外に搬出されたことを町の古老から聞き、全世界に探し求めた。

かつて海外渡航する人の氏名は新聞に掲載されたことから、仲田和上は、近傍在住者には直接訪問し、遠方者には手紙を出して鐘の消息を知らせるよう依頼した。このことで大梵鐘のことが世間に広く知れ渡った。また、国際連盟の本部がジュネーブに作られつつあったので、多くの外交官、学者、ビジネスマン等がジュネーブを訪問するようになっていた。このような状況の中で、ついに1919年、日本の留学生がAriana美術館で大梵鐘を発見した。

仲田和上は1928年8月1日付の書簡を在ジュネーブ名誉日本領事ケルン氏に送り、大梵鐘の返還の願いを伝えるに至った。

在ジュネーブ名誉日本領事ケルン氏からジュネーブ市参事会に送られた返還要請の書面(1929年6月21日)を資料1に示す。

仲田和上の願いは、時の外務大臣・幣原喜重郎、スイス特別全権公使・吉田伊三郎を通じ、ジュネーブ市民の理解を得、1929年10月15日ジュネーブ市議会は、満場一致の議決を持って、大梵鐘を品川寺へ贈還することを決定した(資料2)。

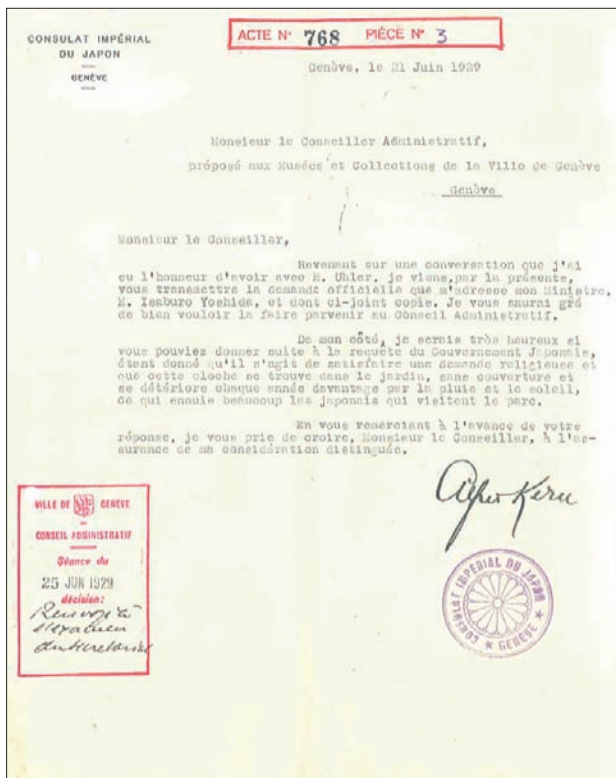
1930年3月4日に大梵鐘はジュネーブ市を出発し、3月24日マルセイユから日本郵船の「諏訪丸」に搭乗され、4月26日横浜港に到着した(資料3)。

こうして順海和上の悲願は、1930年5月4日の東京日比谷音楽堂での「スイス国贈還大梵鐘歓迎会」と、翌5月5日の品川町民総出で迎えた「品川寺大梵鐘歓迎会」で実を結んだ。

日比谷音楽堂の歓迎会には、5,000人が参加した。来賓として、小泉又次郎通信大臣(小泉純一郎元首相の祖父)とスイス国トラベルシニー駐日公使が挨拶した。翌日、牛車にひかれた大梵鐘は、500人を数える行列で、3キロの道中を2時間にわたり、ゆっくりと行進し、正午に品川寺に到着、大梵鐘は到着と同時に、江戸六地藏前の仮鐘楼に安置された。

これより先、ジュネーブ市において品川寺への大梵鐘贈還の決議がなされた際、品川寺はジュネーブ市に、唱道寺型石灯笼を制作して贈ることを決定し、1930年3月6日、アリアナ美術館に贈呈した。

大梵鐘贈還後、順海和上は大梵鐘の永世護持を考えた。そのため、大梵鐘を国宝に指定することと大梵鐘にふさわしい鐘楼を建立することを思案した。この願いは、1937年



■資料1。(出典：ジュネーブ市公文書館)

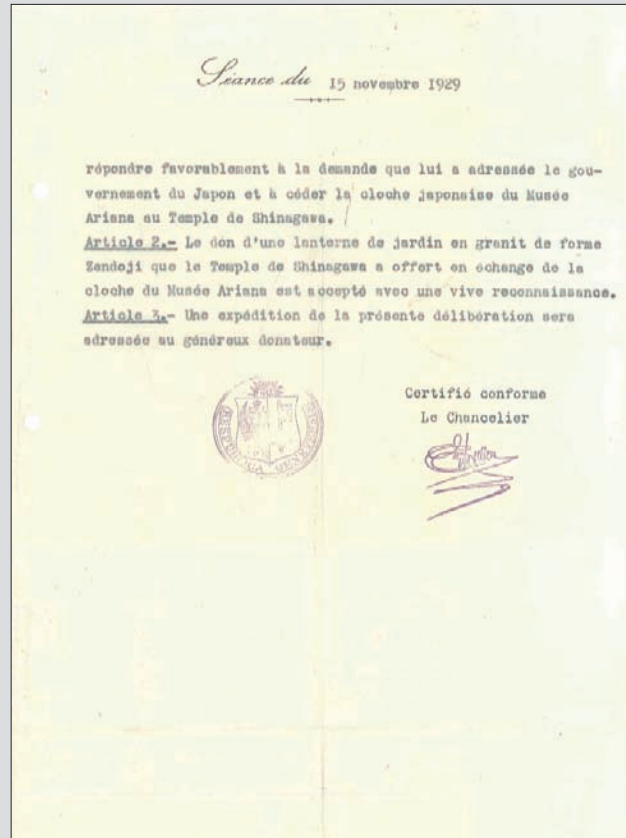
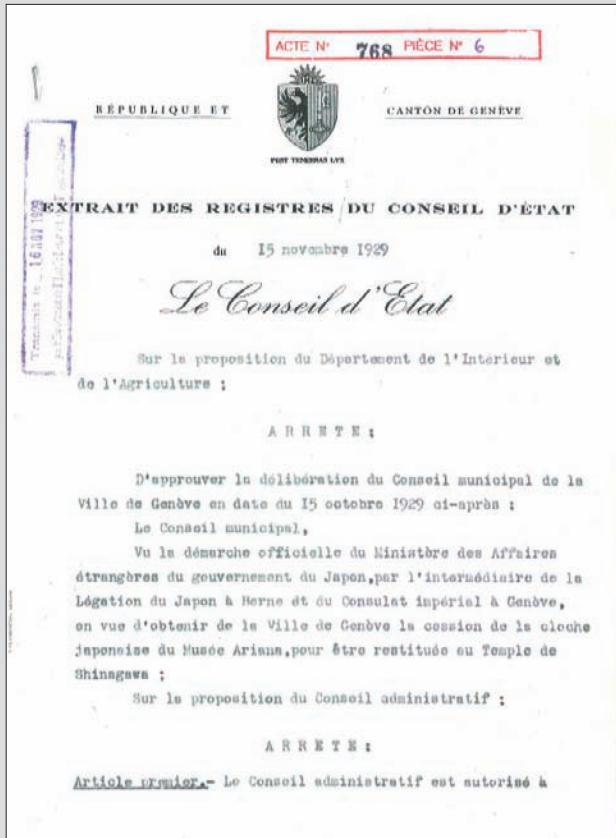
ジュネーブ州参事会の決定 (1929年11月15日)

決定

1929年10月15日のジュネーブ市議会の審議に関し、

第1条 ジュネーブ市参事会がアリアナ美術館の鐘を品川寺に返還する回答を行うことを認める。

第2条 品川寺から鐘の代わりとして提供される灯籠を受領することを認める。



■資料2.

(出典：ジュネーブ市公文書館)



■資料3. NYK Travel Bulletin (1930年7月号)



■写真3. 品川寺の梵鐘 (現在)



9月17日に新鐘楼が竣工し、次いで1941年10月1日に国宝(戦後、元国宝として、重要美術品となる)に指定されることで達せられた。第2次世界大戦中には、大梵鐘の供出命令も出されたが、これを拒むため、品川寺は大梵鐘と江戸六地藏を残し、一切の金物を供出した。また、品川寺は、アメリカ軍の空襲にも被災しなかったため、大梵鐘及び鐘楼は品川寺のシンボルとして存在し続けることになった。

4. 戦後から現代へ —ジュネーブと品川の交流—

1964年10月8日、東京オリンピック開催時に、スイス選手団150名が品川寺を訪問し、大梵鐘と対面した。これを契機に、1968年1月21日に品川寺第31世として晋山した順和和上は、梵鐘を鑄造し、アリアナ美術館へ贈呈することを思案した。和上は、大梵鐘贈還45周年に当たる1975年にアリアナ美術館訪問団を組織し、9月21日にアリアナ美術館を訪問した。そして、1980年、大梵鐘贈還50周年を迎え、和上は再度アリアナ美術館訪問団を組織し、5月23日にアリアナ美術館を訪問した。この頃から品川寺において新梵鐘鑄造の話が具体的になった。

1985年3月には品川区国際民間友好協会(SICFA)設立が設立された。(その後、1992年3月に品川区国際友好協会(SIFA)に名称が変更された。)これは後々非常に重要な契機になるできごとであった。すなわち、ジュネーブと品川の友好事業継続にとって、交流組織の存在が必要不可欠だったのである。

1988年秋、アリアナ美術館のクレリ館長が品川寺を訪問した際、初めて新梵鐘の鑄造と、ジュネーブ・品川友好憲章締結の協議が行われた。そして、大梵鐘贈還60周年に当たる1990年が、大梵鐘鑄造333年、順海和上の23回忌、スイス建国700年と重なったことから、この年に新梵鐘の鑄造と開眼供養、贈呈式を行いたいとの提案がなされた。

1990年6月2日、クレリ館長は再度品川寺を訪れた。この時、ドレイエ駐日スイス公使と高橋品川区長、フィリップ・ニーゼル氏を交え、新梵鐘の贈呈、ジュネーブ市・品川区友好都市締結の提唱が行われた。同年7月には、新梵鐘鑄造の火入れ式が挙行された。同年9月2日からは、品川寺と品川区の代表がジュネーブ市を訪問し、11月4日の新梵鐘開眼式へのジュネーブ使節団の招請と、ジュネーブ・品川友好都市締結の第1回の打合わせが行われた。1990年11月4日、ルネ・エメンゲル市長、クレリ館長、ジュネーブ市立美術館エリック・ブルカルト部長等、18名の使節団が

品川寺を訪問し、新梵鐘開眼供養に参列した。

なお、日本側の動きと並行して、ジュネーブではクレリ館長のグループが鐘楼のデザイン、ジュネーブ当局への必要な建設許可申請、資金集めに動き出していた。そして、鐘楼は、1991年9月に新梵鐘を迎える準備が完了した。

1991年5月18日、多くの品川区民に送られ、新梵鐘は、ジュネーブ市へと出発した。そして、9月8日、アリアナ美術館において、新梵鐘鐘楼落成式、撞き初め式が挙行された。日本側からは、湯川国連大使、伊集院総領事、高橋品川区長、品川区議会議長以下40名が出席した。品川寺からは、品川寺総代、品川寺檀信徒、品川青年会など総勢250名が式典に参加した。翌9日、ジュネーブ市庁舎において高橋品川区長、ジュネーブ市ジャクリン・ビュルナン市長の手により、両市の友好憲章が交わされた^{*1}。

1991年以降の主要な交流は次のとおりである。

1991年9月	ジュネーブにジュネーブ・品川友好協会が設立
1992年8月	品川区から初めて青少年派遣生がジュネーブを訪問
1993年8月	ジュネーブから初めて青少年派遣生が品川区を訪問
1996年9月	ジュネーブで友好憲章締結5周年記念式典
2001年10月	品川区で友好憲章締結10周年記念式典
2006年9月	ジュネーブで友好憲章締結15周年記念式典
2011年9月	品川区で友好憲章締結20周年記念式典を予定したが、東日本大震災のため中止
2016年9月	ジュネーブで友好憲章締結25周年記念式典予定

ちなみに、2015年までの青少年交流実績は、日本からの派遣が192名、ジュネーブからの受入が189名と順調に推移している。

2014年は日本・スイス国交樹立150周年であったが、これを記念して、ジュネーブ日本倶楽部(JCG)はジュネーブ市に桜を20本寄贈する「さくらプロジェクト」を企画し、3月31日にアリアナ公園で植樹式が行われた。

東京の品川寺から贈られた鐘の近くに植えられた桜の並木道には「Allée des Sakura、日本・スイス国交樹立150周年を記念してJCGから寄贈され、2014年3月31日に植樹された20本の桜」と刻まれたプレートが設置された。

以下swissinfo.ch(重信邦子記者)より

「150周年にジュネーブ日本倶楽部(JCG)で何かできな



■写真4. アリアナ公園内に植樹された桜

いか。それも一過性のものではなく長く残ることをしたいと考えていた」と、JCG元会長のアベル美穂さんは話す。

そんなとき、自分たちがスイスという異国の地でスイス人に助けられながらも一生懸命生きている、ないしは「生きたという」証になるものは、ずんずん大きくなっていく桜を植樹することではないか、と思った。

こうして、JCGのメンバー数人が「さくらプロジェクト」を立ち上げた。150周年だから150本植えたかったし、並木にしたかった。それにジュネーブ市内からはずれた場所だと誰も来ないから市内でと考えていた。「そんな条件では、とても無理でしょう」と周囲からは言われたけれど、「やってみなければ分からないじゃない」。

そして実現した。それも国連のそばのアリアナ公園という一等地。植樹が終わった今、「大げさだけど」とアベルさんは一呼吸置いてこう言う。「ジュネーブに来た意味はこれをするためだったのかとったりする」

一方の受け入れ側のジュネーブ市。こうした日本人コミュニティの熱い思いをどう受け止めてくれたのだろうか？

アベルさんは、環境・治安局の緑化担当のオリビエ・ロベールさんとの出会いが決定的だったと言う。「交渉の場で、ロベールさんはソメイヨシノという言葉を発音。びっくり

した。日本の桜をはじめ日本のことをよく知っていた」。

「植樹の提案はスムーズに承諾された」と、ロベールさん。理由は、まず環境・治安局長のギヨーム・パラゾーネさんをはじめ、ジュネーブ市が「日本・スイス国交樹立150周年」という政治的行事への参加に積極的だったからだ。

また、既に植えてあった12本の桜の濃いピンクと今回のソメイヨシノなどの白さが濃淡を織りなすように、そしてこの「桜の雲」の合間に品川の梵鐘が浮かぶように設計もした。梵鐘は、1870年代に品川寺から消え数奇な運命をたどった後、公園内のアリアナ美術館の開閉を告げる鐘として長年使われていたもののレプリカ。「梵鐘は忘れられがちだったが今回の桜並木でまた人々の心に蘇ることだろう」梵鐘と桜並木という「日本の心」の空間が誕生したことは確かかなようだ。

5. おわりに

以上のように、大梵鐘は生々流転、数奇な運命をたどったが、ジュネーブ市と品川区をしっかりと結び友好憲章締結へと導き、青少年交流という確かな実を結んでくれた。これからも大梵鐘が二つの都市の結びつきを温かく見守り続けてくれることを願いつつ、本稿*2を終える。

なお、この鐘はITUから歩いて10分ほどのところにある。国連欧州本部に向かって左に伸びているAvenue de la Paixを進むと、すぐ右側に鐘へ通じる小道がある。ITUの会議の合間に簡単に行けるので、時間がある時にご覧いただけると幸いである。

注

*1 品川区とジュネーブ市との間で始まった友好関係促進の話し合いは、国連欧州本部、国際赤十字を始めとする多くの国際機関の所在地であるジュネーブ側がその中立性を維持する必要性があったため、姉妹都市協定の締結には至らなかったものの、友好憲章の制定が実現した。(フィリップ・ニーゼル氏による関西日本・スイス協会での講演 2010年10月)

*2 本稿は、大川四郎、岡村民夫、岩井隆夫編著『国際都市ジュネーブの歴史的位相－宗教・思想・政治・経済』（仮題）（2016年10月刊行予定）（昭和堂）に所収予定